

埼玉県立 小児医療センターだより

●埼玉県立小児医療センター

〒330-8777 埼玉県さいたま市中央区新都心1番地2

Tel▷048-601-2200(代表) Fax▷048-601-2201 E-mail▷scmc@saitama-pho.jp

URL▷https://www.saitama-pho.jp/scm-c/index.html



埼玉県マスコット「コバトン」

地方独立行政法人化 ―何が変わったか―

副病院長 渡 邊 彰 二



4月より埼玉県立病院群は地方独立行政法人化（以下地独化）しました。地独化の前後でCOVID-19対応以外、病院を取り巻く外部環境に大きな変化は体感していませんが、内部では事業遂行の手順が変わったことを実感しています。変わった手順とは、全ての診療科が中期計画に基づく年度計画を策定し、年度途中でその計画が達成可能か検証し、必要であれば今年度計画の修正をするとともに来年度の事業計画見積もり・人事や働き方の確認・備品更新の必要性等、主に経営に関する相談を病院幹部とするというものです。この工程は流行りの言葉で『PDCAサイクルを回す』というプロセスになりますが、医師にとって慣れ親しんだ工程ではなく、また事業計画の策定に新しい科学的知見を発見する要素がなく、医療従事者としてのスキルアップの実感も得られないため、医学的価値重視の医師には興味を湧きにくいという特徴があります。しかし医療業界における病院・医院経営は厳しさを増しており、セクションごとの年度計画の策定は今や開業医や一部病院の事務方による専売特許ではなく、インフラとしての病院・医院が安定的に維持されるためにどの施設でも医師が策定する事を前提にほぼ必須の重要項目として規定されております。地独化により当院も1企業として『普通の事を普通にやるようになった』ということですが、興味も湧かず慣れない事を無理強ひさせて申し訳ないと思いつつ、『経営に関する視点を個々の職員が持つ』という地独化の目的のためにも診療科長だけでなく全ての医師にこのサイクルに慣れていただかないといけません。

状況が目まぐるしく変化する中で年度計画に基づき多種多様な経営判断を迫られるのは病院幹部も同様です。特に7、8月は小児病院の最繁忙期ではありますが、今年は集団接種へ医療人材を派遣しました。地域からの救急要請には重症患者においてもCOVID-19の感染歴に関係なく応需しました。季節外れのRS感染症患者等の隔離による個室不足への対応としての入院制限をしましたが、一方で医業収益目標値確保のために予定の手術は全件数実施しました。また、患者さんが利用しやすい祝日を3日ほど開院したり、土曜日でも外科・内科系が交代で定時手術をおこなうなど、新しいことへもチャレンジしました。現場に対して負担の大きい指示を次々と出してきましたが、職員の奮闘で夏季休暇シーズンを無事終えることができました。お陰様で、現在まで院内感染を起こすことなく収益に関してもある程度の結果を出すことができました。

幹部も現場の医療従事者と共に大きな達成感が得られたとともに、地独化の影響とまでは言い切れないかもしれませんが病院全体の機動力の大きな改善を感じた夏でした。冬に向けてCOVID-19の第6波への準備と共に、インフルエンザなど既知の感染症大流行への対応が必要になると想定しておりますが、夏が乗り切れたのだから冬もきっと大丈夫、というのは楽観的に過ぎますでしょうか。今年度上半期までは昨年を引き続きCOVID-19に振り回されていますが、こんな年は今年限りにしてもらいたいです。

地独化1年目の埼玉県立小児医療センターは順調に旅を続けています。今後ともご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

埼玉県立小児医療センターだより 第21号 ご案内

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| ○ 副病院長あいさつ..... p. 1 | ○ 認定看護師の紹介..... p. 6 |
| ○ 診療科の紹介..... p. 2 | ○ 理学療法士の紹介..... p. 7 |
| ○ 感染免疫・アレルギー科の紹介..... p. 4 | ○ お知らせ |
| ○ 外傷診療科の紹介..... p. 5 | 受診の案内、病院へのアクセス..... p. 8 |

診療科のご紹介

小児医療センターの診療科をご紹介します。



病院長 岡 明

形成外科



副病院長
渡邊 彰二

放射線科



副病院長
小熊 栄二

神経科



副病院長
浜野 晋一郎

看護部



副病院長兼看護部長
中田 尚子

総合診療科



科長
田中 学

新生児科



科長
清水 正樹

代謝・内分泌科



科長
会津 克哉

消化器・肝臓科



科長
岩間 達

腎臓科



科長
藤永 周一郎

感染免疫・アレルギー科



科長
菅沼 栄介

血液・腫瘍科



科長
康 勝好

遺伝科



科長
大橋 博文

循環器科



科長
星野 健司

神経科



科長
菊池 健二郎

精神科



科長
舟橋 敬一

小児外科



科長
川嶋 寛

心臓血管外科



科長
野村 耕司

脳神経外科



科長
栗原 淳

整形外科・リハビリテーション科



科長
平良 勝章

形成外科



科長
渡辺 あずさ

泌尿器科



科長
大橋 研介

耳鼻咽喉科



科長
浅沼 聡

眼科



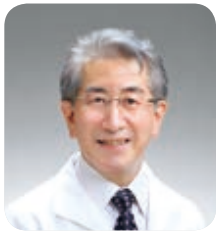
科長
神部 友香

皮膚科



科長
玉城 善史郎

移植外科



科長
水田 耕一

小児歯科



科長
高橋 康男

集中治療科



科長
新津 健裕

救急診療科



科長
植田 育也

外傷診療科



科長
荒木 尚

麻酔科



科長
蔵谷 紀文

放射線科



科長
田波 穰

病理診断科



医長
市村 香代子

臨床研究部



部長
中澤 温子
(病理診断科科長)

<診療部門紹介>



感染免疫・アレルギー科

科長 ^{すがぬま} 菅沼 ^{えいすけ} 栄介

○概要

感染免疫・アレルギー科では、現在流行下にある新型コロナウイルス感染症（COVID-19）や細菌感染症など感染症全般、若年性特発性関節炎（JIA）や全身性エリテマトーデス（SLE）などのリウマチ・膠原病や川崎病、自己炎症性疾患や免疫不全、さらには食物アレルギー、気管支喘息など多岐にわたる疾患を担当しております。またコロナウイルスワクチンを含む予防接種も行っております。表1に令和2年度の新規紹介患者（225名）の内訳を示します。また当科のもう一つの特徴として感染症コンサルテーション部門を有する点です。様々な診療科からの感染症診療に関する相談窓口となり、抗菌薬の選択や投与期間、原因微生物の同定、院内感染対策も助言を行い院内全体の感染症の制御に努めております（年間コンサルト数358件）。

表1 紹介患者内訳（計225名）

分類	割合（%）
感染症	28.0
自己炎症・免疫不全	18.7
リウマチ・膠原病	18.2
未分類（自然軽快など）	10.2
アレルギー疾患	8.9
川崎病	6.2
予防接種関連	1.8
その他疾患	8.0

○リウマチ性疾患・膠原病、不明熱

当科では2021年4月からリウマチ膠原病外来を開設しJIAやSLE、若年性皮膚筋炎、シェーグレン症候群、慢性反復性多発骨髄炎（CRMO）等の診断、治療を行っております。「長引く発熱や周期的に繰り返す発熱」、「あちこちの関節や骨が痛い」、「筋肉の痛みや筋力低下」、「口や眼の渇き」等の見られる患者様を是非ご紹介ください。また現在のリウマチ治療の柱である生物学的製剤（アクテムラ、ヒュミラなど）を積極的に導入し、専門性の高い医療を提供します。また成人期を迎えた症例に対しての移行期医療にも力を注いでおります。

○川崎病

未治療や疑い例、他院での治療が開始された難治例や冠動脈瘤（CAA）合併例など様々な症例に対応いたします。標準治療であるIVIGやアスピリン以外にもステロイド、レミケード、シクロスポリン、最重症例に対しては集中治療科や腎臓科の協力のもと血漿交換を行える体制も整っています。

○新型コロナウイルス診療

基礎疾患を持つかかりつけ患者や重症例を中心としたCOVID-19入院患者の受け入れを行っています（2021年9月4日現在18例）。重症例にはレムデシビルやデキサメサゾンの使用し治療しています。今後も重症COVID-19

症例を中心とした受け入れを積極的に行い、県内の小児医療の最後の砦として専門性の高い医療の提供を行って参ります。また令和3年8月17日からは院内かかりつけ患者（12歳以上）に対する新型コロナウイルスワクチンの接種を開始しました。

※撮影のご同意を頂いております。



○アレルギー診療

週2回の生活アレルギー外来（月、金曜午後）で食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、気管支喘息等の診療を行います。また食物負荷試験は年間40～50件行っております。今後は経口免疫療法の導入も計画しております。さらに難治性気管支喘息患者に対してはゾレア®皮下注を導入しております。

○予防接種センターとしての役割

県内唯一の予防接種センターとして、アナフィラキシーや卵アレルギーの既往を持つハイリスク患者や海外渡航前に必要なワクチン接種を行います。また市町村から新型コロナウイルスワクチン関連の健康被害調査委員会立ち上げの問い合わせが急増しており対応しております。

新着情報（埼玉県立小児医療センターHPに掲載）

・リウマチ膠原病外来の開設（2021年4月開設）

診療日（要予約）：毎週火曜日…13～16時、
第1、3、5水曜日…9～12時

担当医：佐藤智、上島洋二

・子宮頸がんワクチンの推奨

接種日（要予約） 毎週月、水曜日

・サイトメガロウイルス外来の開設（2021年11月開設予定）

診療日（要予約）：第1、3金曜日…9～12時

○患者様の紹介、電話相談

不明熱や川崎病、感染症の治療などお困りの点がございましたらご遠慮なく連絡をいただければ幸いです。048-601-2200（代表）から、平日は科長の菅沼、夜間休祭日は感染免疫・アレルギー科のオンコール医へご相談ください。先生方には今後ともご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

スタッフ

菅沼栄介、川野豊、佐藤智、上島洋二、古市美穂子、大西卓磨、武井悠、出口薫太郎

<診療部門紹介>

外傷診療科



科長 あら き たかし
荒木 尚

外傷は、子どもの日常生活に於いて常に、そして不慮に発生する可能性があり、軽症から重症に至るまで、最も多い救急受診事由のひとつです。小児外傷は、新生児から思春期に至るまで、成長発達に伴う身体サイズや臓器機能の変化に合わせて、その形態が多様に変化することから、成人外傷とは異なる判断や処置が必要となります。また、一つの受傷機転から多部位損傷に至る傾向にあり、急激なストレスに晒された際の各臓器の予備能力も高くないことから、迅速な治療介入が効率よく果たされなくてはなりません。そのため、内科系・外科系を問わず、すべての診療科と円滑に協力し病態変化に対応できること、質の良い画像診断が受けられること、血液検査や輸血が活用できること、手術に必要な麻酔・集中治療管理が安全に受けられること、さらに、けがをしたことの怖れ、けがの痛み、子ども本人やご家族の心の不安や揺らぎに対する配慮など、病院の総合力が必要となります。

外傷診療科は、このような背景に基づき、小児特有の解剖・生理学的特徴を踏まえ、重症度を問わず、「怖くない、痛くない、安全で質の良い」外傷診療の提供を目指したいと思います。県内の救急隊からの直接搬送、県内医療機関からのご紹介による転院搬送の受け入れ、さいたま赤十字病院高度救命救急センターとの協働による現場活動を通して、あらゆる小児外傷の診療を行って参ります。

今年9月小児病院として全国で初めて日本脳神経外傷学会認定研修施設に承認されました。あらゆる頭部外傷例を積極的に受け入れたいと思います。脳神経外科と協働して、重症例に対する緊急開頭術や頭蓋内圧モニタリングを用いた最先端の神経集中治療を駆使し救命に力を尽くします。また、子どもさんの状態が安定した後も、成長や発達に影響する機能に注意し、専門診療科・診療部門と協働し回復期に繋げるよう、柔軟なチーム診療を実現しようと思います。JTDB（日本外傷データバンク）登録施設となり、全国の外傷診療ネットワークに参加して多くの専門医からの助言も診療に活かせるようになりました。救急診療科・集中治療科と共に、埼玉県の小児外傷診療の軸となり、しっかりと使命を果たして参りたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

<特色>

①乳幼児・小児の脳神経外傷（頭蓋頸椎移行部、頸椎・頸髄損傷を含む）

- 重症頭部外傷に対する急性期対応（緊急手術）
- 放射線学的検査による診断と治療
- 軽症例の外来フォローアップ
- 頭蓋骨骨折や脳振盪など軽症頭部外傷の外来フォローアップ

②多発外傷・多数傷病者対応

さいたま赤十字病院ワークステーションとの協働により、小児救急事例への病院前対応を行っています。3次救急選定を受けた小児外傷例はさいたま赤十字病院 Hybrid ER に収容され全身評価を受け、呼吸循環安定化が図られます。外傷診療科は小児特有の視点から初療参加及び助言を行い、施設間搬送を行います。ER 外来では、軽症の方や回復後のフォローアップ、各診療科の外因性救急疾患対応、挫創や熱傷、打撲、骨折などを含むマイナーインジャリーについて常時対応しています。

③各診療科における外傷および外因性救急疾患への対応

（各臓器損傷、骨折全般、皮膚挫傷や皮膚剥奪創、熱傷、中毒、異物など）

全ての外科系診療科の指導助言を受けながら診療を進めています。また、耳鼻科、眼科、歯科など専門性の高い対応を要する外傷性疾患、いわゆる小児のマイナーインジャリーについても、応需可能な施設が稀少な中、各専門診療科の丁寧なバックアップを基盤にして、HCU/PICU 病棟での観察ができることも小児救命救急センター外傷診療科の特徴です。



外傷診療シミュレーション

～3か月児の頭部外傷に対する初期診療とコミュニケーションを訓練する様子～

スタッフ

荒木尚、多田昌弘、宮本大輔、荒川貴弘、松本圭司

<看護部紹介>



小児救急看護 認定看護師



救急外来 細井 ちほり 晴

小児救急看護認定看護師は、少子化や核家族化による育児能力の低下、虐待の社会問題化、小児科医の不足などを背景に2005年から養成がスタートしました。期待される役割は、一次、二次、三次救急問わず、優れたアセスメント能力を持ち、適切なケアを提供することに加え、保護者の育児能力を向上させることや虐待を予防することです。院内では救急外来に所属し、子どもにとって最善の医療と看護を目標に看護実践を行っています。救急外来を受診する子どもたちは、症状や受傷、処置などから生じる身体的な苦痛と、検査や処置に対する恐怖や不安といった精神的な苦痛も抱えています。子どもが呈している身体の状態や心理的サインを読み取りながら、子どもの発達段階に応じて恐怖や不安などを判断し、子ども自身がこの困難に立ち向かえるよう支援をしています。保護者に対しては、子どもの急な状態の変化に混乱している心理を理解し、不安を緩和しながら保護者が、子どもを支えることができるように援助をしています。

救急外来では、年間5000人を超える子どもたちを受け入れています。その多くは不慮の事故による受診です。子どもたちとその保護者に対する日々の看護実践に加え、不慮の事故予防対策に関する啓発活動を積極的に行っています。主な活動の一つに「不慮の事故再発防止プログラム」があります。これは、不慮の事故で来院した子どもの保護者と面談して、自責の念を抱えた保護者の思いに寄り添いながら、今後事故が起らないようにするには、どのようにしたらよいのか、保護者に撮影していただいた自宅内の写真を用いながら、具体的な事故予防対策を検討しています。保護者は事故を起こしてしまったことで、自責の念を抱えていたり、育児に自信をなくしてしまったりします。また、保護者にとって、医療者が事故の責任を突き詰める存在としてみえることもあります。



小児医療センター公開講座（写真1）

保護者の良いところに目を向け、保護者が育児に自信を持てるような関りを大切にしています。

その他、「子どもの事故をなくそう」「子どもを事故から守る～医療現場から地域へのメッセージ」などをテーマに、保護者の方や子ども



商業施設でのイベント（写真2）

に関わる職種の方へ講演を行ったり（写真1）、さいたま市消防局と協働し商業施設でイベント（写真2）を開催したりしていますが、現在は新型コロナウイルス感染に伴い、開催が困難になっています。外出する機会を自粛しているためか、家庭内での事故による救急外来の受診が増えている印象があり、事故予防への啓発活動の重要性をさらに感じています。「知って得する子育て情報」と称し、救急外来待合室を利用した提示（写真3）や、救急の日と題したイベント（写真4）での掲示など、救急外来のスタッフと共に院内での啓発活動の取り組みを継続しています。しかし、この新型コロナウイルス感染拡大の影響がある中で、院外に向けた啓発活動をどのように実施できるかを考えて取り組みたいと思っています。



救急外来待合室の掲示（写真3）

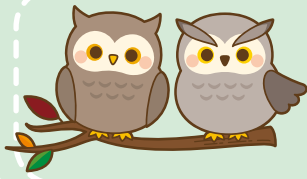
救急外来受診という体験が、子どもと保護者にとって負の感情だけ残るものではなく、子どもにとっては「頑張れた」という自信につながることで、保護者にとってはがんばる子どもを支えることができた実感することは大切なことです。これからも救急外来スタッフと共に子



救急の日イベント（写真4）

どもと保護者の理解を深め、丁寧なかかわりを実践し、子どもと保護者を支えていきたいと考えています。

<コ・メディカル部門紹介>



理学療法士

保健発達部理学療法

保健発達部 ^{しらこ}白子 ^{よしえ}淑江

理学療法士は現在常勤8名で、NICUの新生児から高校卒業までの脳性麻痺や二分脊椎症、運動発達の遅れ、整形外科疾患、がんなどによる、運動・呼吸・哺乳・摂食などの問題の改善に取り組んでいます。



*新生児理学療法

1500g以下の極低出生体重児や先天性疾患児、ハイリスク新生児等に対する評価、運動や哺乳の問題への介入を行い、必要に応じて家族支援を行います。

*急性期理学療法

外傷や整形外科・脳神経外科などの術後の評価と集中的な運動療法や、肺炎などによる呼吸障害への呼吸理学療法などを急性期から行います。



*整形外科・脳神経外科手術後および希少疾患児への理学療法

退院後の生活に向けてストレッチングや筋力トレーニング、歩行練習などを実施します。また、希少疾患児（遺伝性疾患や脳奇形など）に対して運動評価・発達支援を行っています。

*がん治療や移植治療後の運動療法

長期入院治療における体力低下や活動性の低下を予防・軽減するために、筋力トレーニング、定期的な運動を実施し、退院後のスムーズな学校復帰・家庭復帰を目指します。

*補装具の適合評価、情報提供

足の装具や、座ることが難しい子のための椅子（座位保持椅子）、移動のための車いすやバギーなどを医師と相談して作製し、生活しやすい環境の調整を行います。

反り返りが強くて苦しそう
脚がひらかなくておむつ替えが大変
脚がもつれてよく転ぶ



*地域との連携や移行について

小児急性期病院としての役割を考え、近隣の病院・発達支援センター・療育施設等での発達支援が可能な場合は、地域への移行を積極的に勧めています。発達支援の移行が難しい地域の場合は、訪問看護・リハビリテーションと連携をはかり、必要時に補装具作製などを当センターが担い、生活の支援を協力して行います。高校卒業時の当院の利用終了を見据えて理学療法、補装具の調整などの地域への全面移行をご家族と一緒に整えていきます。いずれの場合も、ご本人の状況・ご家族の状況・地域の状況を個別に検討して連携・移行を行います。

*多職種外来への参加

・つくしんぼ外来

出生体重1500g以下の低出生体重児を対象とした新生児病棟退院後のも多職種による発達の経過観察と家族支援の外来です。理学療法士は修正月齢4ヶ月時に運動発達の評価と必要な運動指導をします。また、修正1歳6ヶ月時には歩行の評価を行っています。

・痙縮治療外来

痙縮（けいしゅく）に対して、経口抗痙縮薬やリハビリテーション以外にボツリヌス毒素療法、選択的脊髄後根切断術、整形外科手術、バクロフェン髄腔内投与療法（通称ITB）などを組み合わせて提案する外来です。理学療法士は関節可動域測定や粗大運動能力尺度（Gross Motor Function Measure: GMFM）などの運動機能評価を行い、丁寧に痙縮治療の計画をお手伝いし、周期には集中理学療法を実施 科学的な裏付けを得るための研究活動も行っています。

痙縮治療外来 受診のご案内

痙縮治療外来：毎月第1金曜日 11時
予約センター（048-601-0489）でご予約をお取りください（裏面にご案内あり）

※頭部MRIの画像データをお持ちの場合は、紹介状と一緒に持ちくださいますようお願いいたします。

◆このような悩みをお持ちのお子様、ご家族がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介ください。

お知らせ



Global Gold September Campaign 2021

～世界小児がん啓発キャンペーン～

毎年9月、小児がんの理解と支援を呼びかけるキャンペーンとして、世界各地で「ゴールドリボン」を掲げたり、名所を「ゴールド」にライトアップする取り組みをおこなっています。

小児がん拠点病院である小児医療センターは、「さいたまスーパーアリーナ」にライトアップの協力を依頼しました。



9月9日
さいたまスーパーアリーナ
「ゴールド」にライトアップ
されました



小児医療センターのシンボル
「カリヨン(組み鐘)」も「ゴ
ールド」にライトアップ!

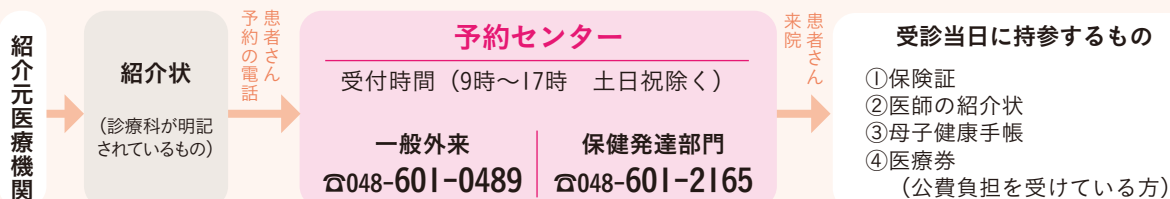
セミナー・研修会等の予定

- 10/30 (土) 移行期支援 Web セミナー
(患者家族向け)
- 11/25 (木) 第146回小児疾患集談会
(医療者向け)
- 11/27 (土) 県民セミナー「いま知って
おきたい! 家庭でできる
感染症対策」(県民向け)
- R4年
3/3 (木) 第7回地域連携懇談会
(医療者向け)
- 3/10 (木) 第147回小児疾患集談会
(医療者向け)

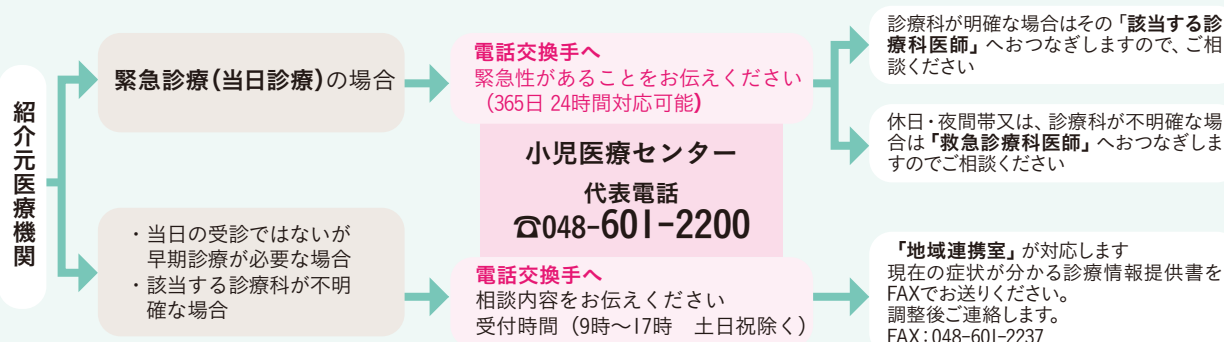
※感染状況により変更や中止となる場合
は、病院ホームページでご案内します。

医療機関の皆様へ 受診のご案内

① 患者ご家族からのご予約



② 医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ



病院へのアクセス



■公共交通機関をご利用の方

- ・JR 京浜東北線、宇都宮線、高崎線「さいたま新都心駅」から徒歩約5分
 - ・JR 埼京線「北与野駅」から徒歩約6分
- ※歩行者用デッキを点線に沿ってお進みください。

■お車をご利用の方

- ・駐車場は有料になります。
 - ・機械式駐車場には車両のサイズの制限があります。
- ※ご利用の時間帯によっては、車両が集中し、入庫まで大変お時間がかかることが予想されます。
できるだけ、公共交通機関のご利用をお願いいたします。

小児医療センターだより第21号

令和3年10月発行

編集・発行 埼玉県立小児医療センター
地域連携・相談支援センター